様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ２３ 日現在

機関番号：５０１０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｈ０２３８０

研究課題名（和文）サハリンアイヌの総合的研究：その成立と変貌

研究課題名（英文）Comprehensive study of the Sakhalin Ainu

研究代表者
中村　和之（NAKAMURA, Kazuyuki）

函館工業高等専門学校・一般系・特命教授

研究者番号：８０３４２４３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　8,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、現在では失われてしまったサハリンアイヌの伝統的な文化を復元することを目的とする。サハリンアイヌは、12～13世紀以降の時期に、北海道からサハリン島に移住した集団である。しかし、文化人類学および言語学的な観点からは、大陸の文化とのつながりが強いことが指摘されている。
本研究では、サハリンアイヌと北海道アイヌの違いがどのように生まれてきたかについて検討を加えた。まず漢語や満洲語の歴史文献を利用して、サハリンアイヌの文化の特徴がいつごろ生じたのかを考察した。つぎに、ガラス玉や出土銭貨などの遺物の現地での化学分析によって、大陸からの交易品がどのように変化したのかについて調査した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
第二次世界大戦後の日本におけるアイヌ文化の研究は、資料的にアクセスがしやすい北海道・本州の調査を中心に進められてきた。サハリンアイヌの研究のためには、サハリン島での現地調査が欠かせないが、遺物や伝世品の成分分析を含む文理融合型の調査は、関根達人氏が先鞭をつけ、本研究はそれに続くものである。今回はサハリン島中部のポロナイスク市博物館の資料も調査し、とくにガラスの分析に特化した蛍光Ｘ線分析計によって、成果をあげることができた。
昨年、国立アイヌ民族博物館が開館し、アイヌ民族の歴史・文化についての関心が高まっている。本研究は、社会的な関心の高まりに対応する学術的な研究成果を提供するものである。

研究成果の概要（英文）：This study aims to reconstruct the now lost traditional culture of the Sakhalin Ainu. The Sakhalin Ainu are people who migrated from Hokkaido Island to Sakhalin Island in the 12th to 13th centuries and onward. However, previous work in cultural anthropology and linguistics points to the strong connection between Ainu culture, in general, and the continental culture of the period. Therefore, this study examined how the differences between the Sakhalin Ainu and the Hokkaido Ainu were born.
First, using historical documents in Chinese and Manchu, we considered when the characteristics of the Sakhalin Ainu culture arose. Next, using on-site chemical analysis of relics such as glass beads and excavated coins, we investigated how trade goods from the continent changed.

研究分野：歴史学

キーワード：アイヌ　サハリン島　交易　文化変容　ガラス玉　出土銭貨　蛍光Ｘ線分析　常平通寶

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究の申請者は、基盤研究（Ｂ）「中近世のアイヌ文化の再構築をめざした学融合的研究」（2011～2013 年度、2014～2016 年度）において、北海道アイヌを中心に、遺跡の調査、遺物・伝世品の成分分析、遺跡の電磁探査、日本語・漢語史料の調査という四つの観点から、学融合型の研究を試みた。本研究は、その研究成果をもとに、サハリンアイヌの物質文化について、学融合的な研究を試みることとした。本研究においては、ロシア連邦のサハリン州での調査が必須であり、学術協力協定の締結や、調査機材の通関のための書類作成など、事前の準備に労力を割かれることとなった。

２．研究の目的

本研究は、現在では失われてしまったサハリンアイヌの伝統的な文化を復元することを目的とする。(1)北海道から移住したサハリンアイヌが、いつ独自の文化を築き、その後どのような変貌をとげたか。(2)サハリンアイヌの文化には、南部と北部とで地域的な違いがあるか。(3)サハリンアイヌの文化には、交易の影響が どのように及んでいるか。(4)サハリンアイヌの文化に、大陸と日本からの影響はどのように及んでいるか、を検討する。サハリンアイヌは、文化人類学・言語学からは大陸の文化とのつながりが強いことが指摘されている。しかし時間的な推移という観点から、サハリンアイヌと北海道アイヌの違いがどのように生まれてきたかについては、検討がなされてこなかった。本研究は歴史文献を利用するとともに、出土遺物や伝世品の成分分析を行うことによって、理化学的な視点からの情報を得る。両者を比較対照することによって、時間軸を重視した文化変容の実態の解明をめざす。

３．研究の方法

調査方法としては、まず元代の『元史』『国朝文類』などの漢文史料の再検討を通じて研究を進めた。とくに『国朝文類』の諸版本を対比するテキスト・クリティーク（史料批判）に取り組んだ。また 1402 年に朝鮮王朝で作成された「混一疆理歴代国都之図」など、中世のユーラシア大陸の地図の検討によって、アイヌ史の研究に利用できる情報の収集を行った。近世後期の日本語史料についても、並行して調査を進めた。

つぎに出土遺物や伝世品から大陸系と思われる資料を選び出した。とくに出土遺物ではガラス玉に着目し、サハリン島に分析装置を持ち込んで、ユジノサハリンスク市やポロナイスク市でオンサイト分析（現地での分析）を実施した。また第二次世界大戦前の樺太庁（日本統治）時代にサハリン島で収集されたガラス玉の成分分析を、函館市北方民族資料館と旭川市立博物館で実施した。ガラス玉と並んで、出土銭貨の成分分析にも順次、着手した。

また大陸系と思われる遺跡の電磁探査も、2018（平成 30）年度から調査の準備を進めていたが、北海道胆振東部地震によって延期と再検討を余儀なくされた。

４．研究成果

（1）ガラス玉の成分分析の結果

ユジノサハリンスク市のサハリン国立大学付属考古学博物館とサハリン州立郷土誌博物館、ポロナイスク市のポロナイスク市郷土誌博物館が所蔵するガラス玉の成分分析を行った。すべて可搬型の蛍光Ｘ線分析装置を持ち込んで分析した。アイヌの首飾りであるタマサイのガラス玉は、紐を外すことができないので分析が難しいが、可能な限り分析した。また第二次世界大戦前の樺太庁時代にサハリン島で収集されたガラス玉の成分分析を、函館市北方民族資料館と旭川市立博物館で実施した。以上のような分析の結果、カリ石灰ガラスのなかでも、中国で製作された可能性が高いカリ石灰ガラス、北海道では出土した例がない組成のカリ鉛ガラス、西アジア起源のソーダ石灰ガラスがサハリン島に流通していたことが確認された。

2017（平成 29）年の 12 月に、ユジノサハリンスク空港で通関した際に、ロシア側の不手際で２台ある分析装置の１台が壊されるという事態が起き、分析が予定より大幅に遅れることとなった。そのため、2018 年よりはウラジオストク空港で通関し、ユジノサハリンスク空港に向かうという経路を取らざるを得なくなった。

（2）出土銭貨の成分分析の結果

出土銭貨・青銅製品の調査や成分分析などは、着手できるところから研究調査を行うこととした。ポロナイスク市郷土誌博物館で、朝鮮王朝時代に鋳造された常平通寶（1633 年初鋳）の発見の紹介を受けた。この銭貨は、中国の清朝銭と混在する形で北

東アジア地域に流通していたらしいことがわかっているが、細かな事情がわかっていない銭貨である。サハリン島で唯一の出土例とのことであるので、蛍光X線分析装置で成分を分析し、日本の博物館に所蔵される樺太庁時代の資料のデータと比較して発表したが、成分にはかなりの差があった。

（3）文献史料による調査の結果

元代の漢文史料の分析により、この時期のアイヌがモンゴル帝国（元朝）の支配の外にいたこと、ニヴフ（旧称はギリヤーク）は百戸・千戸などの身分を元朝から与えられていたことを明らかにした。そして 13、14 世紀のアイヌは大陸文化に接触し始めたが、まだ直接の支配下にあったわけではないことを明らかにした。15 世紀初頭の明代にも朝貢交易が盛んに行われていた時代があったが、大陸の物質文化の影響が強くなるのは、清代の 18 世紀半ばころまで下るのではないかと予想される。元代・明代における大陸文化のアイヌ文化への影響は、大きく評価はできないことがわかった。

（4）白主土城の電磁探査

サハリン島には、大陸系の土城といわれる遺跡が記録だけのものを含めると 4 つある。現存するものは、サハリン南端のクリリオン岬にある白主土城である。この土城の電磁探査を行う計画を立てた。調査は 2018 年 9 月中旬に予定していたが、出発直前の 9 月 6 日に北海道胆振東部地震が起き、新千歳（札幌）空港とユジノサハリンスク空港を結ぶ空路が一時的に運航を停止するという状態となった。やがて空路は復活したが、余震が続いていたため、再度運行を中止する可能性があった。研究分担者のなかには、予定どおりに帰国できない場合、本務に差し障りが生じる可能性もあったため、参加人数を急遽減らして出発するという状況となった。白主土城の電磁探査については、サハリン国立大学で同学の装置の性能を確認するなどの予備調査に留まり、さらに現地調査についての交渉を含めて計画の練り直しの可能性を探ったが、結局実現には至らなかった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計18件（うち査読付論文　12件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　10件）

１．著者名 関根 達人	４．巻 715
２．論文標題 北方のアイヌと和人	５．発行年 2018年
３．雑誌名 考古学ジャーナル	６．最初と最後の頁 14～18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 新井 沙季、中井 泉、瀬川 拓郎、中村 和之	４．巻 53
２．論文標題 旭川市博物館所蔵河野コレクションのガラスビーズの化学組成分析	５．発行年 2019年
３．雑誌名 函館工業高等専門学校紀要	６．最初と最後の頁 35～44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20706/hakodatekosen.53.0_35	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Kazuyuki NAKAMURA, Toshihiko MIYAKE, Junya KOBAYASHI, Naoki TAKAHASHI	４．巻 53
２．論文標題 Chemical Analysis of the Vietnamese Coin “Khai Thai Nguyen Bao” Discovered in Shiriuchi Town, Hokkaido Prefecture, Japan	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Research Reports of National Institute of Technology, Hakodate College	６．最初と最後の頁 58～65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20706/hakodatekosen.53.0_58	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 髙橋 美鈴、越田 賢一郎、竹内 孝、中村 和之	４．巻 53
２．論文標題 北海道恵庭市柏木Ｂ遺跡出土ガラス玉の形態的特徴及び成分分析	５．発行年 2019年
３．雑誌名 函館工業高等専門学校紀要	６．最初と最後の頁 90～95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20706/hakodatekosen.53.0_90	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 竹内 孝、榊田 朋広、中村 和之	4．巻 53
2．論文標題 オホーツク文化終末期の土器群と化学分析による製作地の推定	5．発行年 2019年
3．雑誌名 函館工業高等専門学校紀要	6．最初と最後の頁 96～115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20706/hakodatekosen.53.0_96	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 新井 沙季，中井 泉，中村 和之，猪熊 樹人	4．巻 31
2．論文標題 北海道根室市穂香竪穴群、コタンケシ遺跡出土のガラス玉化学組成分析	5．発行年 2019年
3．雑誌名 根室市歴史と自然の資料館紀要	6．最初と最後の頁 27～35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 麓 慎一	4．巻 33
2．論文標題 近代日本と千島列島のアイヌ民族	5．発行年 2019年
3．雑誌名 第33回北方民族シンポジウム 網走 報告書	6．最初と最後の頁 49～53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中村和之，山本けい子，寺門 修	4．巻 19
2．論文標題 柳之御所遺跡の砂金は蝦夷ヶ島の砂金か？	5．発行年 2019年
3．雑誌名 平泉文化研究年報	6．最初と最後の頁 31～43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中村和之	4．巻 32
2．論文標題 アムール河下流域における明朝と先住民との朝貢交易	5．発行年 2018年
3．雑誌名 第32回北方民族文化シンポジウム 網走報告書 環北太平洋地域の伝統と文化 2 アムール下流域・沿海地方	6．最初と最後の頁 19-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小田寛貴，中村和之	4．巻 75
2．論文標題 加速器質量分析法による蝦夷錦の放射性炭素年代測定―「北東アジアのシルクロード」の起源を求めて―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 考古学と自然科学	6．最初と最後の頁 41-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 新井沙季，馬場慎介，中井 泉，中村和之，塚田直哉	4．巻 52
2．論文標題 アイヌ文化期の道南地域出土ガラスの化学組成分析	5．発行年 2018年
3．雑誌名 函館工業高等専門学校紀要	6．最初と最後の頁 20-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20706/hakodatekosen.52.0_20	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中村和之，三宅俊彦，GORSHKOV Maxim Valerievich，小林淳哉，村串まどか	4．巻 52
2．論文標題 Chemical Analysis of the Chinese Coin Yongle Tongbao owned by Khabarovsk Regional Museum named after N.I. Grodekov	5．発行年 2018年
3．雑誌名 函館工業高等専門学校紀要	6．最初と最後の頁 39-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20706/hakodatekosen.52.0_39	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 佐藤雄生，竹内 孝，中村和之	４．巻 52
２．論文標題 北海道松前町の福山城下町遺跡から出土したガラス玉の成分分析	５．発行年 2018年
３．雑誌名 函館工業高等専門学校紀要	６．最初と最後の頁 61-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20706/hakodatekosen.52.0_61	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 髙橋美鈴，越田賢一郎，竹内 孝，中村和之	４．巻 52
２．論文標題 北海道せたな町南川２遺跡出土ガラス玉の成分分析	５．発行年 2018年
３．雑誌名 函館工業高等専門学校紀要	６．最初と最後の頁 66-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20706/hakodatekosen.52.0_66	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 竹内 孝，中村和之	４．巻 52
２．論文標題 土器の胎土中に含まれる砂粒の化学分析による製作地の推定	５．発行年 2018年
３．雑誌名 函館工業高等専門学校紀要	６．最初と最後の頁 75-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20706/hakodatekosen.52.0_75	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山本けい子，寺門 修，竹内 孝，中村和之，広瀬義朗，八重樫忠郎，瀬川拓郎	４．巻 52
２．論文標題 柳之御所遺跡の出土遺物に付着した金の産地推測と統計分析	５．発行年 2018年
３．雑誌名 函館工業高等専門学校紀要	６．最初と最後の頁 105-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20706/hakodatekosen.52.0_105	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 麓 慎一	4．巻 710
2．論文標題 ロシアの環太平洋政策と日本	5．発行年 2017年
3．雑誌名 歴史と地理	6．最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小田寛貴，中村和之	4．巻 74
2．論文標題 北海道函館市鉄山遺跡において発見された鉄滓の14C 年代測定と鉄山町付近の製鉄に関する文献史料からの検討	5．発行年 2017年
3．雑誌名 考古学と自然科学	6．最初と最後の頁 15-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　5件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 中村 和之
2．発表標題 北海道の教育におけるアイヌ史・アイヌ文化の位置づけ
3．学会等名 日本考古学協会2018年度総会（招待講演）
4．発表年 2018年

1．発表者名 中村 和之
2．発表標題 アイヌの北方交易とアイヌ文化の研究 －分析科学の助けを借りて－
3．学会等名 第54回応用物理学会北海道支部・第15回日本光学会北海道支部 合同学術講演会（招待講演）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Kazuyuki NAKAMURA
２．発表標題 The Circulation of Chinese Coins in the North of Japanese Archipelago and the Ainu
３．学会等名 The Asian Association of World Historian (AAWH)　2019
４．発表年 2019年

１．発表者名 中村 和之、山本 けい子、寺門　修
２．発表標題 柳之御所遺跡の砂金は蝦夷ヶ島の砂金か？
３．学会等名 第19回平泉文化フォーラム（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 中村 和之
２．発表標題 蝦夷錦と青玉の来た道
３．学会等名 16-19世紀東アジア国際関係史研究の可能性
４．発表年 2019年

１．発表者名 麓 慎一
２．発表標題 近代日本とアイヌ社会－千島列島のアイヌを中心に－
３．学会等名 「明治150年」関連施策各府省庁連絡会議（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 中村和之
２．発表標題 アムール河下流域における明朝と先住民との朝貢交易
３．学会等名 第32回北方民族文化シンポジウム 環北太平洋地域の伝統と文化2 サハリン（招待講演）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計1件

１．著者名 小口雅史編（中村和之分担執筆）	４．発行年 2017年
２．出版社 同成社	５．総ページ数 383
３．書名 古代国家と北方世界	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	関根　達人 (Sekine Tatsuhito) (00241505)	弘前大学・人文社会科学部・教授 (11101)	
研究分担者	麓　慎一 (Fumoto Shinichi) (30261259)	佛教大学・歴史学部・教授 (34314)	
研究分担者	田村　将人 (Tamura Masato) (60414140)	独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部・主任研究員 (82619)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	中井　泉 (Nakai Izumi) (90155648)	東京理科大学・理学部第一部応用化学科・教授 (32660)	
研究分担者	酒井　英男 (Sakai Hideo) (30134993)	富山大学・大学院理工学研究部（理学）・名誉教授 (13201)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ロシア連邦	ロシア科学アカデミー極東支部歴史学・考古学・民族学研究所	サハリン州立郷土誌博物館	サハリン国立大学	他1機関